

巻 頭 言

真島 秀行

今年、西暦 2010 年は、国際生物多様性年ということで各種のイベントがある。日本数学会のウェブページが開設された 2000 年は実は「世界数学年 2000」であったが、日本では ICME 9（第 9 回数学教育世界会議）を千葉県幕張で開催した以外はあまり盛り上がりなかった。当時も理事を拝命していたが残念に思った。

今から 2 年前の 2008 年には、日本数学会と日本数学史学会が主となって関孝和三百年祭記念事業が行われた。これは、日本が誇る世界的な数学者（当時の和算の大家）関新助孝和（新助は通称で孝和が諱）が物故したのが宝永 5 年 10 月 24 日で西暦に直すと 1708 年 12 月 5 日となり、ちょうど 300 年となるのが 2008 年 12 月 5 日であったことによる。仏教式にはその 1 年前の 2007 年 12 月 5 日が三百年忌法要の日となり、ここから約 1 年間に記念祭年として、博物館における展示、国際研究集会等、筆者は（2005-6 年理事会の命によりこの“担当”となり）実行委員長として事業をあらゆる面で牽引し、その報告書も作成し、遅くなったが今年 4 月に寄付者等関係者に送付した。

関孝和の業績顕彰は無論であり、国際研究集会のプロシーディングス（小松彦三郎編集長）として伝記および業績についての 600 ページほどの研究報告が出版される予定であるが、人材育成を大きな柱に据えていた関孝和三百年祭記念事業を展開中に、何人かの記念祭年を設けて、世間の注目を引き寄せ、数学振興に役立てられないか、と考えるようになった。新聞で何度か取り上げられはしたものの、残念ながら関孝和三百年祭年は当時それほど注目されなかったが、筆者はひたすら古文書を読み関新助孝和先生の履歴をかなり明らかにできたので今後、期待される動きがあるかもしれない。

2010 年 2 月 28 日が高木貞治没後 50 年となることに気づき、関孝和記念祭にならって、（高木貞治は無宗教であったが）2009 年 2 月 28 日から 2010 年 2 月 28 日前後の約 1 年間に、高木貞治記念祭年とすることを、関係する学会、人々に提案し受け入れられ高木貞治 50 年祭としていくつかの事業が行われた。2010 年 2 月 20 日には日本数学会主催の市民講演会も東京大学大学院数理科学研究科棟の大講義室で行われ、これを予告する新聞記事を書いて貰えたこともあり、220 名程の参加者を得て盛会であった。昭和 25 年 10 月 10 日 NHK ラジオ第一放送の音声を収録した DVD の作成も行い関係者等に配付したが、日本の科学、数学の状況について「原理は原理、応用は応用と見て、繋がっていることを見ない」のを「おいおい改めていくのでしょ」と言われているが、「理論的・原理的なものと、最後の末端的な応用と区別する考え方」が未だに改まっていないので是非とも多くの方々に聞いてもらいたかったのである。

高木貞治の師であり、日本の近代数学界で菊池大麓とならんで重要な人物である藤澤利喜太郎が生まれたのは、文久元年九月九日（西暦 1861 年 10 月 12 日）で、西暦 2011 年は

藤澤利喜太郎生誕 150 年祭年にあたり、日本数学会では 2011 年 3 月末の年会において記念展示会と講演会を企画している。藤澤は、物理学を初め志向していたが、菊池大麓の勧めもあり留学し「国家のために」と数学を学び研究し、セミナー方式で高木貞治らを育てた。統計学への寄与、総選挙の数学的な分析など数学の実用普及にも力を注ぎ、また初等中等教育体制構築への寄与も大きい。貴族院議員として意義ある質問も多く行ったことも記録されている。

4 年後の 2014 年は建部賢弘生誕 350 年祭年にあたる(寛文四年(西暦 1664 年)生まれ、生まれ月は旧暦六月)、2015 年、2016 年はそれぞれ小平邦彦、伊藤清生誕 100 年祭年に当たる。菊池大麓(1855 - 1917)については、生誕 150 年は逃しているが没後百年は 2017 年になる。

この文を書いている気付いたことがある。日本初の数学関係の国際研究集会は、「代数的整数論国際会議」(1955 年、東京および日光)で、高木貞治先生が名誉議長であったが、この年はまさに菊池大麓生誕 100 年祭年にあたっていた。日本数学会の当時の議事録を調べたわけではないのでよく分からないがそれが意識されていたのかもしれない。なお、日本数学会の前身の東京数学物理学会や日本数学物理学会の議事録などに目を通したことがあるが、菊池大麓が中心となった関孝和二百年祭において、高木貞治は学会の会計委員、遺書出版の調査委員会や関先生記念講演会調査委員会の委員として貢献している。

数学者の心は、まずは研究を通して伝わっていくが、また、このような記念事業を行うということによっても受け継がれてきていると思う。建部、小平・伊藤、菊池らの記念祭年の頃には、私も必要とあればまた学界のために貢献をしようと考えている。しかし、今の日本の状況を考えると、数年後などとは言ってられない。「29 学会(43 万人会員)会長緊急声明」にあるように、国家予算について、「財政運営戦略の中期財政フレーム(平成 22 年 6 月 22 日閣議決定)では、国立大学及び大学共同利用機関の運営費交付金、私立大学等の経常費補助、科研費などの政策的経費 13 兆円を年間 1 兆円程度削減することとし、年間約 8%削減を 3 年間継続するとしている。さらに、7 月 27 日の閣議決定『平成 23 年度予算の概算要求組替え基準について～総予算の組替えで元気な日本を復活させる～』において、各省の来年度の概算要求を本年度の 10%減とすることとしている。これがそのまま適用されるとすれば、国立大学法人等への交付金も私立大学等への補助金も 10%の減額を受けることになる。」これは大学の教育や研究に甚大な影響を及ぼし、数学の教育、研究の環境も悪化する。そうならないためにも、引き続き間断なく数学の必要性をより分かり易く世の人々に訴えていかねばならないと考えている。

実は、今年、磯村喜兵衛吉徳の没後三百年周年である。磯村は肥前の鍋島家に初め仕え、後に奥州二本松藩の丹羽家に仕えたが、作事(建築関連)奉行として二本松城に水道を引く工事を行なったし、『算法闕疑抄』という和算書を書いており、理論と実践を行っていた。江戸時代も少なからず有為な数学者がいたのである。

(お茶の水女子大学・日本数学会理事)